

国際社会学教育の実践と課題

—初年次教育における写真観察法の事例—

人 見 泰 弘

目 次

1. 国際社会学教育の授業実践
2. 授業の概要
3. 写真観察法の学習成果
4. まとめと今後の課題

要 約

学生は、どのように国際社会学を学ぶのか。本稿は、初年次教育科目で実施した写真観察法の授業実践をふりかえり、国際社会学教育としての学習成果と課題を検討する。

写真観察法は、学生が携帯カメラを使用してフィールドワークを行い、情報収集力・プレゼンテーション力・文章表現力などの習得を目指すプログラムである。今回はグローバルゼーションというキーワードで浮かび上がる「風景」を写真に収め、発表する課題に取り組んだ。

学生の学習成果を検討すると、海外から日本に流入するモノ・ヒト・文化の影響を読み解こうとする作品や海外に進出する日本文化や日系企業に注目する作品が見られた。学生は、グローバルゼーションの多面性を読み取りつつ、国際社会的想像力を習得するための第一歩をふみだしている。

キーワード：国際社会学教育，初年次教育，写真観察法

1. 国際社会学教育の授業実践

1.1. 国際社会学教育のアプローチ

国際社会学は、国境を越える社会現象に社会的な方法からアプローチしようとする学問領域である。国際社会学や関連するテキストを見ると、その研究対象は幅広く、国際移民や多国籍企業、都市やメディア、観光や宗教、スポーツや社会運動など様々なテーマが取り上げられている[Cohen and Kennedy 2007, Fulcher and Scott 2011, Martell 2010, 梶田編 2005, 樽本 2009]。ところで、国際社会学は大学教育においてどのように実施していけばよいのだろうか。

国際社会学教育をめぐる議論を見渡すと、大きく二つのアプローチが想定される¹⁾。ひとつは、国際社会学で教えるべきテキストを検討するという教育者の視点からアプローチしたものである。この場合、カリキュラムや教員が授業で教える内容、国際社会学のテキストなどの検討が行

われる。教員が学生に伝えるべき理論や概念とは何か。教員がどうすれば体系的に国際社会学的知識を学生に伝えられるのかといった観点からテキストを読み解く。学生に伝えるべき内容の整理整頓が行われ、その内容は教員による講義やゼミでの輪読を通じて、学生に伝達されていくことになる。

もうひとつは、国際社会学という学問を学生がどのように学んでいくのかという学習者の視点からアプローチしたものである。たとえば宮内 [2013] は、学生の学習過程に焦点を置いた教科書のなかで、現在の教科書が「何らかの答えがあるような記述」をせざるを得ない状況にあることを問題視し、社会学教育について次のように述べている。「社会学のもっとも大事なところは、理論や概念を『理解』することではありません。大事なのは、理論や概念ができてくるそのプロセスそのもの、それらの理論や概念をめぐる激しい議論そのものです。作ったり、壊したりするプロセスこそが重要なのです。こんな議論があります、はい、わかりました、ではなく、こんな議論もあるけど、自分たちはどう考えるか、どういう議論をするか、です」[宮内 2013: 149]。このように述べたうえで、宮内はグループワークなどを通して、学生がどう学ぶかという学習プロセスの重要性を指摘している [宮内 2013]。

本稿は後者のアプローチ、すなわち、学生がいかに国際社会学を学ぶのかという観点に基づき、著者の国際社会学の授業実践をふりかえる。学生の学習成果を検証しつつ、今後の授業実践の課題を明示することにしたい。

1.2. 写真観察法の試み

今回検討するのは、携帯カメラを用いた写真観察法による授業実践である。写真観察法は、あるテーマにそって、それにふさわしいと考えられる風景を写真に収めて発表するというプログラムである。このプログラムを積極的に進めてきた後藤は、写真観察法を調査・教育プログラムと位置づけている [後藤 2000, 2005, 2009]。

写真観察法は、以下のように進められる。たとえば後藤の場合は、「写真で語る：『東京』の社会学」というテーマで実施している。そこでは、学生は「東京」や「東京人」の特徴が表されていると判断した場面を写真に収めてデータ化し、適切なタイトルを付けるとともに、写真の説明文を作成するという課題に取り組んでいる。写真観察法は、写真を撮るということだけではなく、写真を通して学生自身の「東京」に対する認識をもあぶりだしていく。なぜその場面を写真に撮ったのか、そこにどのような「東京」や「東京人」の特徴を見出したのかを説明文としてまとめ上げていくのである。写真が映し出す社会の姿とともに、写真を撮る側の「まなざし」や立ち位置を読み解いていく作業が展開されていく²⁾。

本稿ではこうした写真観察法の手法を用いて、著者が初年次教育において実施した国際社会学の授業実践を検証する。学生がどのように国際社会学を学習していくのか。どう国際社会学的想像力を学んでいくのかを、学生の学習成果をもとに検証したい。

取り急ぎ、本論に進む前に、著者が写真観察法を初年次教育科目において実施した理由をいくつか述べておきたい。ひとつは、もともと初年次教育科目は、学生が大学生活に必要なアカデミッ

クスキルを習得するための機会である。写真観察法は、情報収集・発表・文章表現・ふりかえりを伴う作業であり、アカデミックスキルの実践的な習得プログラムとしてふさわしいと考えられた。ここにひとつの理由がある。

もうひとつは、国際社会学のおもしろさともかかわる。先述のように、国際社会学は幅広いテーマを対象とする学問である。写真観察法は、学生が写真という形態で社会の一側面を切り取ることになるため、その成果にも様々なテーマが反映されることを期待した。多くの写真が集まることで、学生が国際社会学の研究対象の多様性を確認し、日常の様々な社会現象に興味関心を持つのではないか。こうした期待も、初年次教育科目において写真観察法に取り組む背景にある。

何より、本稿は先行研究が少ない国際社会学教育の具体的な授業実践を論じたものである。参照できるプログラムが限られているなか、教員は具体的にどのようなプログラムに取り組むべきなのか。どのような取り組みが効果的なのかを手探りで行わなくてはならない。こうした研究蓄積の空白を埋めることも、本稿のねらいのひとつである。

以下では、写真観察法の授業実践を取り上げ、その学習成果を検討していく。第二節で、授業の概要を確認する。第三節では、学生の成果物に注目し、課題を通して彼らが何を読み取ったのかを解釈していく。最後に今回の授業実践をまとめ、今後の改善点を探る。

2. 授業の概要

2.1. 発展セミナーの位置づけ

著者は、2011年度と2012年度に担当した発展セミナーで写真観察法を実践した。発展セミナーは、名古屋学院大学外国語学部国際文化協力学科（以下、本学科）の一年生を対象とした必修の初年次教育科目である。本学科は、入学直後の春学期に基礎セミナーという初年次教育科目を開講し、大学教育に必要な「読む・書く・聞く・話す」ための基礎的なアカデミックスキルを習得する。履修者30名程度の発展セミナーは、基礎セミナーに引き続いて秋学期に開講され、さらなるアカデミックスキルの習得を目指す科目と位置づけられる。発展セミナーでは、学生はアイデア発散法や情報収集力・整理法の習得、文章表現法、プレゼンテーションなどの課題に、個人・ペア・グループ単位で取り組む。写真観察法は、発展セミナーの中心課題として位置づけられ、15回の授業回数数の半数以上がこのプログラムに当てられた。そこでまず、プログラムの概要と進め方を確認しておくことにしよう³⁾。

2.2. 写真観察法の概要と進め方

【事前学習と課題】

写真観察法は、事前学習・データ収集と発表準備・発表会の実施・報告書作成とふりかえりという手順を進めた。事前学習として、後藤らがすでに実践してきた素材からいくつかを例題として提示し、グループでタイトルとその説明文を作成する課題に取り組んだ。写真から社会の姿を読み解くという作業を何度か体験したのち、学生が取り組む課題と方法、評価などを教員から指

示した。実際に出した課題は、以下のようなものである。

【課題：グローバル化する現代社会】

グローバル化する現代社会を象徴的に表すと考えられる「風景」を写真に収め、適切なテーマ（タイトル）を掲げるとともに、解説を加えたレポートを作成しなさい。

グローバリゼーションを中心課題とした理由は、いくつかある。ひとつは、本学科が異文化理解や国際協力を中心に学ぶ学科であり、できるだけ幅広い「国際的な」現象が題材に取り上げられるようにしたためである。もうひとつは、グローバル化という抽象的な概念をキーワードとすることで、グローバル化という概念から様々な物事を想像する、アイデア発散法としての課題も兼ねさせたかったためである。三つ目は、グローバル化という概念を日常生活に当てはめて考えるという作業から、抽象的なキーワードと日常生活の具体的な場面との「接合」を学生が意識するよう促したかったためである。

このような課題を提示するとともに、学生には教室外でフィールドワークを行い、「グローバル化」を表していると判断した様々な「風景」を写真に収める作業に取り掛かること、また写真には適切なタイトルと説明文を付けて発表することを伝えた。

また課題を遂行するにあたり、学生には携帯電話のカメラ機能を使用するように伝えた。携帯カメラであれば、ほぼ全員の学生が持っているからである。また携帯電話を授業の課題で使用することは、学生にとっては意外に思われることが多く、これにより興味関心を抱く学生も少なくない。こうした意外性は、学生の動機付けにも貢献していると考えられる。

最後に、学生には写真を教員に添付ファイルで提出するよう指示し、期日までに提出がない場合は個別に連絡を送った。集まった写真は教員がA4用紙にカラーで印刷し、授業で配布することにした。

【発表準備】

課題の提示から二週間後、学生に印刷した写真をそれぞれ返却し、グループ内で写真を閲覧させた。また他のグループにも写真を回して閲覧させ、様々なアイデアがありうることをクラス全体で確認した。

各グループには、持ち寄った写真を参考に共通のテーマを読み込ませた。必要な場合には写真の追加や変更を認めることを伝えるとともに、写真の並び替えなどを通じて発表の構成を考えさせた。

【発表会と報告書作成】

発展セミナーでは四回ほど発表時間を設け、グループごとに発表した。発表者以外の学生は、発表に直接質問するだけでなく、コメントシートの記入も行った。コメントシートには、「1. 発表の内容について、おもしろいと思ったこと・興味を感じたことを書いてください」「2. 発表の内容について、よくわからなかったこと、次回教えてほしいことを書いてください」「3. ①資料の工夫、②発表方法の工夫、③コミュニケーションの工夫、④その他の工夫、の視点から、よかった点やここを工夫すればさらによくなると思われる点を書いてください」の三つの項目を設定し、

学生同士のピアレビューができるようにした⁴⁾。コメントシートは、記入後に教員が一度回収し、人数分のコピーを取ったうえで発表者に翌週返却した。

発表の終了後、コメントシートの内容もふまえて、学生は写真にタイトルと説明文を付けるレポート作成課題に取り組んだ。レポートには、写真とA4一枚程度の説明文に加えて、撮影日時と場所も記入させ、教員に添付ファイルで提出するよう指示した。教員は集まったレポートを印刷し、後日全員で製本作業を行い、半年間の学習成果をふりかえった。

3. 写真観察法の学習成果

3.1. 全体の概要

発展セミナーにおける一連の過程を通じて、学生が作成した報告書、発表資料とコメントシートが提出された。ここからはこれらの資料を検証し、学生が何を学び取ってきたのかを読み取りながら、写真観察法による学習成果をまとめたい。

2011年度と2012年度の報告書には、それぞれ30点以上、複数の写真を提出した学生もいるため、合計で70点ほどの写真が掲載されている。写真のテーマを見てみると、次の表3.1.のような作品が見られた。

表3.1. 写真観察法のテーマの一覧

<p>【2011年度】 留学生、大須、マクドナルド、ユニクロ、スターバックス、コーラ、韓流文化のポスター、エスニック料理店（トルコ、中国、ブラジル）および雑貨店（ブラジル）、日系企業、日本食（寿司など）、スポーツ大会、クリスマス、ハロウィン、多言語表記、コーヒー、外国人参政権反対のチラシ、英会話学校、観光地、教会</p> <p>【2012年度】 海外旅行パンフレット、日本の伝統芸能、留学生、輸入雑貨、ハロウィン、ブラジル人教会、エスニック料理店（タイ、トルコ）、多言語表記、空港、英会話学校、韓流系CD、衣料品、食料品（バナナなど）、外国語テキスト（英語、中国語）、多国籍企業、国際会議場、外来種</p>
--

これらを被写体のタイプに注目して類型化すると、①商品（飲料品や食料品など）、②建物（料理店、教会、英会話学校、日系企業）、③多言語表記（街中や道路、駅の案内板）、④人物（高校時代の留学生）、⑤景観（空港や名古屋城など）、⑥印刷物（パンフレットや教科書）、⑦文化イベント（ハロウィン、クリスマス）などとなった。商品や建物、多言語表記は毎年登場し、また課題が10月ごろに出されることもあり、ハロウィンやクリスマスといった文化イベントも見られた。

また撮影場所に注目すると、①ショッピングモールやスーパー（食料品、輸入雑貨、韓流製品）、②大学構内（学内イベント、留学生）、③自宅（衣類など）、④近隣や通学途中の風景（エスニック料理店や雑貨店、教会、英会話学校）、⑤海外という類型ができる。大学や自宅、通学やアル

バイトまでの経路など、学生が身近な生活空間から写真を探し出していたことが読み取れる。

3.2. 写真から読み解く学生のまなざし

では、学生が収集した写真と説明文に注目して、彼らがグローバリゼーションというテーマで何を読み取ろうとしたのかを見ていこう。学生が写真に収めた風景を見ると、テーマは大きく二つに分かれた。ひとつのテーマには、海外から日本国内に流入したヒト・モノ・文化の影響を読み取ろうとしたものが見られた。もうひとつのテーマには、日本文化や日系企業がいかに海外の人々に影響を与えているのかを読み取ろうとしたものがあった。学生は、作品のなかに様々な解釈を施し、グローバリゼーションの多面性を捉えようと試みていく。以下で、いくつかの作品の概要とともに確認していこう。

3.2.1. 海外から流入するヒト・モノ・文化

(1) 日本に根付く異文化的な空間

ひとつは、海外から流入する海外の文化を写真に収め、日本国内に異文化的な空間が構築されていることを主張する作品である。学生 K. S. は、日本に浸透している外国の食文化に関心を抱き、名古屋市内あるエスニック料理店を写真に収めた（【写真1】）。ケバブというトルコ系料理を取



写真1（上下） トルコ系エスニック料理店
『2011年度秋期 発展セミナー・論文集』より一部を転載

り扱う店である。説明文では、ケバブの作り方や留学生が多く働いていることを店長への聞き取りから明らかにしている。そして、写真のキーワードともなるハラールの意味を解説する。ハラール処理をした食材にはマークが付いていること、「アルコールを使っておらず、神様にささげから殺した肉のみを使っています」とイスラム文化の儀礼に従って処理された食材が使用されていることを指摘したうえで、店舗の看板にあるハラールマークが「イスラム教徒の人々が安心して食べられる全世界共通のマーク」であると指摘している。この作品は、ハラールというキーワードを押さえてイスラム文化の特徴を描き出すことで、日本文化とは異なる文化圏の存在を浮かび上がらせる作品となった。

また日系ブラジル人の両親を持つ学生N. S. は、豊田市内にあるブラジル系エスニック料理店の様子を写真に収めた。説明文には、顧客はブラジル人が多く、日本人は少ないようだとのある。店内にはお菓子や肉類、野菜や香水などブラジルからの輸入品が並べられており、ポルトガル語の新聞や雑誌も販売されている。ブラジルで見かけられる店内キッチンが併設されており、サンドイッチやコシヤ、ヒゾーレス、キベといったスナック系のものや惣菜を作って販売している。

この学生は、「両親が来日した当初は、日本食の味に慣れていなかったため、この店にとっても助けられた」とし、こうした店は「ブラジル人同士での会話を楽しんだり、情報交換をしたり、ブラジル人にとってとても便利な場所だ」とまとめている。エスニック料理店や雑貨店などを写真に収めた作品は他にもいくつか見られるが、それらは異文化を受け入れる日本人という視点から解説するものだった。それに対して、この学生は日系ブラジル人として実際に国境を越えて移動してきた人の視点から風景を読み取ろうとしており、他の作品にはない独自の特徴を持つ。日本におけるブラジル文化の一端を内側から読み解こうとしたものと言える。

日本に根付く他国の文化として、海外の文化イベントを取り上げる作品もある。学生S. K. は、ハロウィンで使用するカボチャのランタンのグッズを写真に収めた。説明文では、ここ10年近くで日本に広まったハロウィンがヨーロッパに起源がある儀礼的なイベントであることを指摘している。

この作品では、ハロウィンという文化イベントの急速な広まりに驚くとともに、「自分たちが使うハロウィンのパーティグッズなども、中国からの輸入品であるので、それもまたグローバル化であると感じた」と述べている。日本で見られるハロウィンという社会現象は、文化的なコンテンツはヨーロッパに由来するものでありつつ、グッズなどの物質的な素材はアジアに由来する。ここには異なる地域から異なる要素が移動するというグローバリゼーションの重層的な性質が読み取られている。

いずれの写真も、日本国内にイスラム文化、ブラジル文化、ヨーロッパ文化が根付いていることを読み取ろうとしている。文化が国境を越え、日本社会に独自の文化的な空間が生み出されるところに、グローバリゼーションの姿を読み取っている。

(2) グローバリゼーションの影響を受ける日本社会の反応

二つ目は、海外から様々な文化やヒトなどが流入することによる日本社会の対応を読み解こう

とした作品である。言語に関心を持った学生F.Y.は、まず岐阜市にある英会話学校の写真を収めた。英会話学校はすでに各地で一万教室ほどあるようで、グローバル化が進み、ますます英語への関心が高まっていると彼女は指摘する。そして、どのような人々が英会話教室に通うのかを疑問に思い、この英会話教室に聞き取りを行った。その結果、「若い方中心だと思っていた」が「小学校に入る前の子どもから定年した方まで幅広い」年齢層の人が教室に通っていること、また目的も「趣味や留学、ビジネスのため」と幅広いことを突き止めている。英語が多くの人々に影響を与える言語になっていることを語る作品となった。

また、この学生は、JR岐阜駅の多言語の案内掲示板も写真に収めている（【写真2】）。掲示板は、日本語や英語、ハングル、中国語、ポルトガル語、タイ語で表記されていた。なぜこれらの言語で表記するのかを、看板を設置している岐阜観光コンベンション協会に電話で聞き取りを行ったところ、タイ語やポルトガル語を話す外国人住民が増加していることが原因だとわかり、人口変化が多言語表記と関係していたことをつきとめている。トルコ系料理店で店長に聞き取りをした学生と同じく、この学生も写真に収めた風景に関して関係者に聞き取りを行い、写真を見るだけではつかめない背景の裏側を把握することができた。聞き取りの結果は、単なる客観的な観察にとどまらずに、その背景をうみ出す社会的な事象を読み解き、説明文の内容に厚みを加えている。この学生が用いた二つの写真は、日本社会が多言語化を進めている事実と背景を提示するものとなった。

また言語とは異なる角度からグローバル化の影響を読み解こうとした学生もいる。学生I.C.は、大学の近くにある衣料品店の店舗を撮影した。この衣料品店は、世界的に店舗展開を進めているグローバル企業である。学生は、この企業のリクルートの方法に注目する。というのは、発表会の少し前に、この企業が新卒採用で日本人学生よりも留学生を積極的に採用するというニュースが流れたからである。学生は、「グローバル化によって企業が欲する人材も変わった」と記し、いずれ自分たちが経験する就職活動では、こうした留学生と競争するほどに労働市場は



写真2 岐阜駅の多言語表示の案内板
『2011年度秋期 発展セミナー・論文集』より一部を転載

国際化しているのだと主張する。留学生は教育移民、高度人材と呼ばれる人々である。今後は彼らとの交流のみならず、彼らとの競争が視野に入るとして、経済のグローバル化を強調している。

最後に、グローバル化が進むことへの日本社会の不安を読み解こうとした作品もある。学生 T. H. は、街中で外国人参政権付与に反対する運動を目撃し、その配布物を写真に収めた。出稼ぎや留学などで日本にも外国人が多数来日している。日本での長期滞在をする人も増えつつあり、彼らへの参政権の付与がニュースのトピックとして取り上げられることも多くなった。しかし、外国人参政権には賛否両論があり、日本国内でも結論が出ていない。学生 T. H. の作品は、グローバル化に対する「拒絶」もひとつの反応として見られることを確認するものとなっている。

これらの作品は、グローバル化が進むことによる日本社会の変化を中心に読み解いたものである。言語環境の多様化、国際的な人材競争、グローバル化への反発など、これらが取り上げる事象は同じではないが、いずれもグローバル化が日本社会の構造に変化をもたらしていることを主張した作品と言える。

(3) 日本国内で見られるモノや文化の流入の背景

三つ目は、海外から様々なモノや文化が流入する背景、すなわち送り出す国や地域の状況に焦点を当てようとする作品である。学生 T. R. は、自宅にあった衣類を写真に収めている。衣料品のタグを見ると、ホンジュラス、カンボジア、ニュージーランド、中国、バングラデシュなどあり、衣料品が東アジアや東南アジア、南米で生産されていたことがわかる。彼は、これらが人件費の安い途上国の工場で作られているという共通点を見出し、衣料品を国際的な経済格差を読み解く素材と解釈している。私たちの身の回りには、衣料品のように海外で作られたものであふれている。それらがどこで作られ、どんな人がそこで働いているのかを考えようという主張が込められた作品だと言える。

またモノだけではなく文化に注目した作品もある。韓国文化に関心を持つ学生 K. S. は、名古屋市の大須地区やショッピングセンターで、自分が好きなドラマのキャラクター商品、アイドルグループの広告、韓国製の美容グッズをカメラに収めた。日本で最初に流行した韓国文化は冬ソナであり、40-50代の女性にヒットしたものだ指摘しつつ、いまでは10-30代の比較的若い年齢層の女性がターゲットになっているとその広がりを分析している。また学生 T. A. も、別のショッピングセンターのCD売り場で設置されていた K-pop コーナーを写真に収めた。韓流ブームが日本だけではなく東南アジアや他の地域にも広がりつつあると記述し、その裏には韓国政府がコンテンツ産業に力を注いでいることを指摘している。国家が主導する文化政策が文化のグローバル化の背景にあることを学習する作品となっている。

二つの作品は、日本で見られるモノや文化が送り出される地域の事情を読み解いたものである。日本と海外とは深くつながっているとはいえ、そのとき日本の国境の外について考えることは少ない。しかし、グローバル化は、海外の国々との経済格差や、他国の文化政策などによって進行している。日本の国境の外での動きが、グローバル化をうみ出していることを、

これらの作品は主張しているのである。

3.2.2. 日本文化や日系企業が国内外に与える影響

(1) 海外へと進出する日本文化や日系企業

海外のモノや文化ではなく、日本のモノや文化に注目する作品もいくつか見られた。学生K. M. は、ニュージーランドに留学した際に、日本文化や日本製の商品を多数見かけることがあった。ショッピングモールなどでは、日本食レストランがいくつか営業しており、まずは、そこで見かけたラーメンや唐揚げ定食などの日本食を写真に収めた。「寿司などはヘルシー食材」として定着していることも確認しつつ、「日本の国境を越え、日本食を食べる生活が取り込まれつつある」ことをグローバル化だと捉えている。さらにこの学生は、現地で流通していた日本製の飲料品、お菓子などにも注目した（【写真3】）。ただし、よく見ると日本の製品がそのまま海外で売られているわけではない。たとえばある乳酸飲料は、ニュージーランドでは「cow piss（牛の尿）」と別の言葉と聞き間違えられることがあるため、名前を変えて陳列されていた。また「日本に留学経験のある友人が、当時あるスポーツドリンクを見たとき、（その名前から）日本人は汗を飲んでいるのかと思い飲めなかったと言っていた」と言う。文化の違いから日本で流通している商品をそのまま海外に持ち込むことは難しいため、それらは現地の習慣や文化にあわせて修正されている。世界の国々にも日本食文化が根付きつつあるとはいえ、それは単なる「移植」ではなく、現地のスタイルに合わせて広まっていることが見出された。



写真3 日本企業が海外で販売する飲料品
『2011年度秋期 発展セミナー・論文集』より一部を転載

日本で暮らしていると、グローバル化は海外からヒト、モノや文化が流入することだとイメージされやすい。しかし実際には、この作品が示すように日本からも様々なモノやヒト、文化が海外に進出している。それらは乳酸飲料の事例のように、現地社会に溶け込むために日本で流通するものとは少しだけ形を変えていることもある。日本文化や日本の製品が海外に進出し、世界の国々にも影響を与えている側面があることを、これらの作品は示していると言える。

(2) 外国人観光客を引き付ける日本文化

学生H. J. も、日本文化に焦点を当てている。ただし、彼が撮影した場所は日本国内である。彼は外国人観光客が日本の甲冑を付けてコスプレをしている写真を収めた。日本のサブカルチャーは、すでに海外でも有名である。とりわけ漫画やアニメといった文化産業は、世界的に認知されている日本文化と言える。また学生A. Y. も、名古屋市内で着物を来た女性が行進するイベントの写真を収めながら、多くの外国人観光客が集まっていたことを指摘する。浅草雷門などの寺院や東京スカイツリー、名古屋城と行った観光地も、外国人に向けて日本の文化や歴史を表現するシンボルとして多数の外国人観光客を引き付ける。日本的な伝統文化を見せるイベントや観光地は、外国人が想像する「日本らしさ」を消費する機会ともなっている。

これらの作品が示すように、日本文化も海外にアピールする機会を増やしている。外国人観光客が日本文化を消費するという現象も、グローバリゼーションのひとつの側面だと言えるのである。

4. まとめと今後の課題

最後に、写真観察法の取り組みの成果をまとめ、今後の課題を述べておきたい。

何よりの収穫は、ひとつのテーマから学生がグローバリゼーションの多面的な性質を読み取ろうとしていたことである。グローバリゼーションは、国境を越えて各地の社会関係が深化していく社会変動過程であり、その影響は経済や政治、社会文化の領域まで幅広く見られる。今回の写真を見る限り、モノと文化に偏る傾向は見られるものの、様々なテーマを学生が想定していることが確認された。また海外からのモノやヒト、文化が国内に流入するだけではなく、日本文化や商品、企業も海外に流入していくことが指摘されており、学習成果の広がりを示すものとなった。

加えて、写真の風景を読み取るための資料探しや聞き取りを行った作品が見られた。これらは写真のおもしろさをまわりの学生に伝え、説明に厚みを生み出すものとなった。さらにこうした試みを多くの学生ができるような仕組みを考える必要があるだろう。

一方で課題として残されたのは、写真や説明文の練り直しがやや不足気味だったことである。写真を改めてみる限り、学生が主張したいことと収めた写真との関連が捉えづらいものがあった。テーマによっては被写体を変えたほうがよいのではないかと感じる作品もいくつかあり、写真や説明文の練り直しに取り組ませる仕掛けが、今後必要になってくるだろう。

グローバル人材が求められる今日、語学力だけではなく、グローバリゼーションや異文化理解

など国際社会学的な想像力を深めた人材が求められている。今回の写真観察法は初年次教育科目で実施したものであるけれども、このプログラムはこうした人材に必要なスキルの習得にも様々なに応用できるものと思われる。学生がグローバル化時代を生き抜くためのスキルを習得するプログラムを、これからも検討し、開発せねばならないだろう。

付記

本論文は、2013年度NGU教授・学習開発研究会の成果報告の一部である。

注

- 1) なお、社会学教育をめぐるでは、学会誌である『社会学評論』でも何度か取り上げられるテーマとなっている。2005年に発行された第56号3巻には「特集・テキストに映し出される社会学の知」が、2008年に発行された第58号4巻には「特集・社会学教育の現代の変容」が編纂されている。
- 2) 詳細は、後藤 [2000, 2005, 2009] などの他に、後藤らが取り組む「東京人」観察学会 (<http://www.n510.com/>) のサイトも参照。また写真観察法に取り組んだ授業実践例として、川又 [2001] がある。また携帯電話のカメラ機能を使用したフィールドワークの実践としては、加藤 [2009] がある。
- 3) 紙幅の都合で省略したが、基礎セミナーでも「先生インタビュー」と題する課題において、携帯カメラを使用したプログラムを実施した。このプログラムでは、学生がペアを作って本学科教員にインタビューを実施し、そのときに人物像がわかるような写真を撮って授業で報告するというものである。
- 4) コメントシートについては、佐藤編 [2010] を参考にして作成した。

参考文献

- Cohen, Robin, and Paul Kennedy 2007 *Global Sociology 2nd eds.*, New York: New York University Press.
- Fulcher, James, and John Scott 2011 *Sociology 4th eds.*, Oxford: Oxford University Press.
- 後藤範章 2000 「集合的写真観察法—都市社会調査の新地平」『社会学論叢』137: 23-42.
- , 2005 「[集合的写真観察法] に基づく教育実践」『社会情報』15(1): 37-47.
- , 2009 「ビジュアル・メソッドと社会学的想像力— [見る] ことと [調べる] ことと [物語る] こと」『社会学評論』60(1): 40-56.
- 梶田孝道編 2005 『新・国際社会学』名古屋大学出版会.
- 加藤文俊 2009 『キャンプ論—あたらしいフィールドワーク』慶應義塾大学出版会.
- 川又俊則 2001 「短大生による社会学の実践—写真観察法レポートの試み」『立教女学院短期大学紀要』32: 49-62.
- Martell, Luke, 2010 *The Sociology of Globalization*, Cambridge: Polity.
- 宮内泰介 2013 『グループディスカッションで学ぶ 社会学トレーニング』三省堂.
- 佐藤浩章編 2010 『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部.
- 樽本英樹 2009 『よくわかる国際社会学』ミネルヴァ書房.